令和３年度入学試験問題（前期日程）

小　論　文

（初等教育教員養成課程）

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること
2. 解答紙には、かならず受験番号を記入すること

〔１〕　つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

かつては日本でも、子どもが幼少時から家業や家事、子守りなどの手伝いをし、働き手の一人でした。それが、もう子どもの労働や稼ぎをあてにする必要はなくなり、子どもはもっぱら親の心を満足させる存在、親の愛情の対象となりました。これは、子どもの身にとって大きな変化です。過酷な労働などまったく無縁の生活となり、家では手伝う余地もなくもっぱら手厚い保護を受ける身になったのです。それどころか、子どもの存在そのものが、親に精神的心理的な満足を与える価値ある存在とされているのです。

このような子どもの生活を、戦前・敗戦直後の子ども時代を経験している世代の人々は、「恵まれている」とみています。貧しく厳しい子ども時代を送らざるを得なかった世代の人々が、子どもにはそのようなつらい経験をさせたくない、幸せな子ども時代を送らせたいと願って努力しての今日といえるでしょう。その限りでは成功し、「恵まれた」子ども時代をもたらしたといえるかもしれません。

しかし、①労働や稼ぎを求められず、ひたすら精神的・心理的価値が期待されているということは、当の子どもにとって本当に恵まれたことでしょうか？果たして幸せなことでしょうか？答えはノーです。その理由は、子どもの命がほぼ完全に親の手のうちに入ってしまった、子どもは親の意志・決断の産物となった、その親による子どもへの教育的営為は多くの問題と限界をはらむことになったことにあります。

幼いときから勉強はおろか遊ぶどころではなく働くことを余儀なくされ、しかもその稼ぎは親や企業の懐に入ってしまう、そのような貧しい国々の子どもを考えると、その限りでは日本の子どもたちは幸せでしょう。けれども、子どもたちが働く必要も機会も経験も失ったことは、自力で〝やった！〟〝できた〟と自分の有能さや達成感、さらに自尊などを味わう機会を失ったこと。これは、子どもの発達にとって大きな損失です。

１９３０年代初頭の大恐慌時代、親の失業や家業の倒産などによって没落した家庭の子どもたちは、それまで親に庇(ひ)護された豊かな生活がすっかり崩壊してしまいました。その子どもたちのその後の成長を追った研究は、過酷な環境の変化が子どもたちに必ずしもマイナスとはなっておらず、むしろ自分の存在や力に自信や自負の念を抱

き強い達成への動機が育っていたことを明らかにしています。家庭の没落に出会った後、子どもたちはやむなく働きに出たり家事や子守りを引き受けることになりました。それは、それまでの手厚く庇(ひ)護されてきた身にはつらい経験でしたが、自分のわずかな稼ぎや家事をしたことが親の助けになり親を喜ばせる初めての経験でした。自分のしたことが親の力になれるとの経験は、自信や自尊感情をもたらしたばかりか、それまで親から与えられ、してもらうばかりだった自分が、他者のために役立つという喜びも初めて味わったのです。

他者への共感と援助する行動は、幼いときから家業や家事を手伝ったり弟妹の世話をするなど、他の人のために働く機会のある社会の子どもたちに強くみられます。自分が他人の役に立ち喜んでもらえる経験が、他者を共感的に理解し、必要な手を差し伸べる力を養成し発達させるからです。

日本の子どもたちは、豊かで便利な生活のなかで親に何でもしてもらい不自由なく与えられています。自分でする必要は何もない、自分の勉強や遊びだけでよい、そのような境遇で子どもが育つことは、前述のような②貴重な発達の場を失っていること。それは、大変不幸なことではないでしょうか。

出典：『子どもという価値　少子化時代の女性の心理』 柏木惠子（著）、2001年、中央公論新社、 pp. 172-174. （設問の都合により見出しを省略し、本文の一部を改変している。）

（問１）下線部①について、筆者はなぜ「答えはノー」と考えているのですか。100 字以内で説明しなさい。

（問２）下線部②について、失われた「貴重な発達の場」において養われてきた力を、現代の子どもたちにも育んでいくために、学校教育ではどのようなことができると思いますか。あなたの考えを 300 字以上 400 字以内で書きなさい。